国語教育相談室

中学校
no. 78

光村図書

特集
評論を読み、自分の考えをもつ

巻頭エッセイ
言葉に命が宿る時　刈屋富士雄

新連載
アクティブ・ラーニング　Q&A

書写
教えて！　硯のこと

授業にデジタル教科書を！



光村のデジタル教科書がさらにパワーアップ!
国語，英語，美術の授業を強力にサポートします。

光村デジタル教科書

学校フリーライセンス
学校フリーライセンスとは，校内でご利用になるパソコンの台数を制限しない契約です。

【指導者用】光村「国語デジタル教科書」1～3年
DVD版 各72,000円+税　ダウンロード版 各23,000円+税

【指導者用】光村「英語デジタル教科書」1～3年
DVD版 各75,000円+税　ダウンロード版 各24,000円+税

【指導者用】光村「美術デジタル教材」わくわく美術室
DVD版（1年契約版） 12,000円+税　DVD版（5年契約版） 50,000円+税

体験版は Web サイトよりダウンロードすることができます
www.mitsumura-tosho.co.jp/digital/

CoNETS®
光村図書は，CoNETS（コネッツ）に参画しています。

光村図書出版株式会社　www.mitsumura-tosho.co.jp
〒141-8675 東京都品川区上大崎 2-19-9
TEL :03-3493-2111（代表）　03-3493-5741（デジタル教材お客様窓口）
FAX :03-6721-6884 E-mail : digital-info@mitsumura-tosho.co.jp

光村図書

中学校　国語教育相談室 通巻No.167　2015（平成27）年９月16日発行
発行人＝常田 寛　発行所＝光村図書出版株式会社　東京都品川区上大崎 2-19-9　〒141-8675　電話 03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp　E-mail:koho@mitsumura-tosho.co.jp　印刷所＝株式会社 加藤文明社　デザイン＝mg-okada

個人情報の取り扱いに関しては，弊社「個人情報保護方針」に則り，適切な管理・保護に努めてまいります。
詳しくは，光村図書ウェブサイトをご覧ください。 www.mitsumura-tosho.co.jp　広報誌の配送停止をご希望の方は，光村図書出版までご連絡ください。

CONTENTS

探検！言葉の森27　「人」であり「者」であり……——森山卓郎

巻頭エッセイ 言葉と向き合う 02　言葉に命が宿る時——刈屋富士雄

特集 04　評論を読み，自分の考えをもつ

授業リポート　筆者が教室にやってきた！——お茶の水女子大学附属中学校
授業を終えて——宗我部義則
授業を参観して——布施英利

アクティブラーニング Q&A 1 16　アクティブ・ラーニングとはどのような学習を指すのか——冨山哲也

書写の用具研究 4 18　教えて！ 硯のこと——宝研堂

22　光村図書ウェブサイトのご案内

探検！言葉の森 27

「人」であり「者」であり……

早稲田大学教授　森山卓郎

まずはクイズから。「日本人」と「代理人」のように、接尾辞的に使われる「○○人」には、「じん」「にん」という二通りの読み方があります。この違いは何によるのでしょう——。おおまかには、「○○人」は、「宇宙人、南蛮人、芸能人、常識人、教養人」など、所属や性質を表す言葉の場合、大体「じん」。一方、「代理人、保証人、弁護人、仲買人、仕掛け人」などでは、「人」は「にん」と読まれる。まあ「世帯人」などもあるが、大きく言えば、「～する人」という場合には「○○人」は「にん」である。

実は、「～する人」を表す表現は多様だ。「○○人」以外に「販売者」「歌い手」「歌手」「運転手」「運転士」「連絡員」などいろいろある。意味も違う。「支配者」は文字通り「支配している人」だが、「支配人」はマネージャーという役職の人。「歌い手」と「歌手」は、同じように「歌う人」と言えるが、後者は職業的な意味だ。カラオケに行って歌い始めれば、私でも「歌い手」だが、「歌手」ではない。一方、「歌手」と呼ばれる人なら、歌い終わって黙って道を歩いていても「歌手」。その認定はついて回る。

このように、「～する人」には、動きの現場で成り立つものと、動きの現場を離れてついて回るものとがある。「来館者」は動きの現場を取り上げた認定の場合が比較的多い。歩いている時「歩行者」になり、温泉施設に入っている時「来館者」になる。「負傷者」なども、その時どきの出来事からの認定と言える。「運転者」と「運転手」「運転士」を比べると、「者」が動きの場によって規定される一時的性質なのに対して、「○○手」「○○士」は職業・資格を表すことが多いのではないか。しかし、同じ「者」でも、「教育者」はちょっと違うタイプ。職業や役割としてついて回る。家でお風呂に入っていてもカラオケで歌っていても、「教育者」。実は「保護者」もそう。「保護」という「動き」はもはや抽象化している。子どもが教育を受けている間、「保護者」はついて回る。寝ていても起きていても「保護者」。そう、「教育者」「保護者」の「者」には重みがあるのだ。

私たちは忙しい。いろんな「○○者」になったり、やめたり。さらに、いつもついて回る「○○者」であったりもする。

さて、いま現在こうしているあなた、あなたは「何者」ですか？——はい、申し上げましょう。この文章の「読者」。え？ 漢字を二つ増やして、「愛読者」？……おお、感激。ありがとうございます！

言葉に命が宿る時

NHKアナウンサー　刈屋富士雄

二〇〇一年二月、東京代々木体育館で行われたフィギュアスケートグランプリファイナルの男子シングルは、彗星のごとく現れた十八歳のロシアの天才に大きな注目が集まっていました。後に世界チャンピオンと五輪金メダリストとなり一つの時代を築いたプルシェンコです。この時男子シングルの実況を担当した私は初めてプルシェンコを生で見ました。それまでプルシェンコの演技は映像では何度も目にしていましたが、実際に見る彼の演技は映像とはまるで別人。圧倒的なスピード感と卓越した演技力、そして会場全体を引き込むカリスマ性。放送に入り、プルシェンコがものすごい演技を見せている間、「この素晴らしい演技と会場の空気感を一言で表現しなければ……」と思いました。そして訪れたフィニッシュの瞬間、私は「ん〜〜〜〜、プルシェンコ！」と発していました。恥ずかしながら言葉が見つからなかったのです。たかが七年ぐらいのフィギュア中継の経験ではこの程度かとすごくショックで落ち込みました。

私は二〇〇四年のアテネオリンピック体操男子団体決勝、体操ニッポン二十八年ぶりの王座奪還の瞬間で「栄光への架け橋だ」という言葉を選択しました。放送の始まる前も、始まってからも、実はこの言葉は頭の中に全くありませんでした。というのも、競技中のいくつもの奇跡が重ならない限り、この言葉を選ぶ状況にはなっていなかったからです。放送前に私が準備することは、言葉ではなく価値判断の確認です。四位だったらなんて評価するのか、惨敗なのか惜敗なのか、三位だったら復活と言えるのかなど、その評価の確認です。

言葉は、その時の状況に応じてそれまでの取材の蓄積と経験から湧き上がってきますが、その土台となるのが価値判断です。正確な判断をするには、体操ニッポンの歴史と各選手の競技者としての歩みを体に浸み込ませておく必要があります。二十年にわたって世界の王者として君臨した日本、モスクワ五輪ボイコットによって失った王座を取り戻せないばかりか、アトランタで惨敗しシドニーで惜敗し、アテネに復活をかけてきた経緯を、ただ知識として知るだけではなく、十二年にわたってその道程を一緒に歩いてきた実況者としての自らの経験が判断の指標になります。そして、決勝が始まって次々と起こる奇跡的な展開、金メダル大本命の中国の脱落、最終種目鉄棒でライバルルーマニアとアメリカのエースの失敗など。これらがすべて重なった時、初めてメダル確実の状況が生まれ、私の頭に「復活への架け橋」という言葉が浮かび上がってきました。

さらに最終演技者冨田選手の演技が始まる直前、この時の採点方法で、演技の途中で金メダルか確定することに気づいた時、初めて体の奥底から「栄光」という言葉が湧き上がってきました。その瞬間は、冨田選手が演技の途中のコールマンという技が決まった時、つまりこの技が決まれば、その後冨田選手が着地で大失敗しても金が決まると確信しました。そこでコールマンが成功した後は、最も伝わる瞬間を狙って「伸身の新月面が描く放物線は、栄光への架け橋だ！」と実況しました。演技の途中で金メダルが決まると気づけたのも、あのタイミングが一番伝わると確信できたのも十二年の体操の取材・実況の経験と蓄積があったからこそだと思います。もちろんこの言葉に強い生命力が宿っていたのかどうかは分かりませんし、別のより良いコメントが存在したかもしれませんが、それは私が判断することではなく受け取った人が決めることだと思っています。

ところが、放送が終わるとフィギュアスケートのファンから「あの実況は良かった」という声が続々と寄せられました。視聴者の皆さんが勝手に共感してくれたのです。私としては苦し紛れに名前を呼んだわけですがファンの皆さんも一緒に「そうだよね、プルシェンコすごいよね」ってなってしまったわけです。実況コメントとして成り立っていないにもかかわらず、何かが伝わったのです。

この時はフィギュアファンの共感に救われましたが、もしこの時この瞬間の本質を言い尽くす一言が私の中に湧き起こっていたら、また違った感動を視聴者と共鳴できたかもしれません。テレビ中継で最も大切なことは「伝える」ということだとこの時実感しました。何を伝えるのか、何が伝わったのかという一点です。スポーツにおいて同じ瞬間は二度とありません。そのたった一度の瞬間に、伝えるべきことを伝えられるかどうか、それが最も大切なことであり最も難しいことでもあります。正解はありませんが、どれだけその本質に迫ろうと努力できるかだと思います。

では伝わるための最大のポイントは何でしょうか。実況においては言葉の選択とタイミングだと思います。どんなに良いこと、正しいことを言っても言葉の選択やタイミングが正しくなければ伝わりません。間違ったことは言っていないのに視聴者の耳に入らず、ただの効果音と化すケースが少なくありません。適切に選ばれた言葉には、命が宿ります。いいタイミングで発せられた言葉にはより強い生命力が加わり、これを受けた人の心でも生き続けるのだと思います。



刈屋富士雄
かりやふじお

1960年静岡県生まれ。早稲田大学卒業後,83年NHKに入局し,スポーツアナウンサーとして活躍。特にアテネ五輪体操男子団体決勝の「伸身の新月面が描く放物線は,栄光への架け橋だ」という実況は五輪放送史上に残るコメントと高く評価されている。トリノ五輪では,荒川静香選手のフィギュアスケートアジア史上初の金メダルの瞬間を「トリノのオリンピックの女神は,荒川静香にキスをしました」と実況。バンクーバー五輪ではフィギュア史上最高の戦いといわれた浅田真央とキムヨナの対決を臨場感豊かに伝えた。

特集

評論を読み、自分の考えをもつ

筆者が教室にやってきた！

お茶の水女子大学附属中学校教諭
宗我部義則（そがべよしのり）先生
×
二年生（三十名）
×
芸術学者・批評家
布施英利（ふせひでとし）さん



「君は『最後の晩餐』を知っているか」の筆者・布施英利さんと，生徒たち。

以前、小誌で、宗我部義則先生の「君は『最後の晩餐』を知っているか」（二年）を使った授業の模様をご紹介しました。（※1）

修復前と修復後の「最後の晩餐」を比較したり、裏切り者のユダは誰かを話し合ったり、生徒たちは評論の対象となる絵画を読み解きながら、筆者の考えを読み取り、さらに「筆者の考えについて自分はどう思うか」をまとめていきました。授業はたいへん盛り上がり、読者の先生方からも大きな反響をいただきました。

そして、今回の特集ではなんと、筆者である布施英利さんが、宗我部先生の評論の授業を参観することに。筆者との交流を通して、生徒たちはどのように自分の考えを深めていくのでしょうか。

撮影：鈴木俊介

※1 「中学校国語教育相談室 No.69」（2012年9月発行）で，「評論の文章をどう教えるか」と題し，宗我部先生の授業を紹介した。小社ウェブサイトの「光村コミュニティ」（会員専用）で閲覧が可能。

単元名

評論を読む

使用教材
「君は『最後の晩餐』を知っているか」（二年）

授業は全七時間。布施さんをお迎えするのは第六時です。そこに至るまで、第一時から第五時にどのような授業が行われたか、簡単にご紹介します。

まず、第一時では、宗我部先生が生徒たちに「評論」という言葉の意味を辞書で調べさせ、「何ができれば、評論を『読めた』と言えるだろう」と投げかけました。生徒たちからは、「筆者が述べている新しい見方や考え方を読み取ること」「筆者が述べていることに対して、『ふーん』でなく『へぇ』と思えること」「筆者の考えに対して、自分の考えをまとめること」という意見が出され、この三つを、単元の学習目標に設定しました。そして先生は、「最後の晩餐」の修復前と修復後の画像を見せ、「どちらが修復後だろう」と生徒たちに質問。教室は大いに盛り上がり、教材文への関心が一気に高まりました。

そして、第二時では全文を通読。第三時では、「最後の晩餐」の絵に線を書き込んで遠近法を確認したりする中で、絵の魅力を実感させ、さらに筆者が「最後の晩餐」をどう評しているか、本文中の言葉を抜き出して考えさせました。

第四・五時では、これまでの流れを受けて、次の三つの論点について、筆者の考えに共感できるのか、疑問に感じることはあるかなどをグループで話し合いました。

論点❶「最後の晩餐」は「絵画の科学が生み出した新しい絵」という布施さんの考え。

論点❷「かっこいい。」とは、どんな点がかっこいいのか。共感できるか。

論点❸「本当の『最後の晩餐』は二十一世紀の私たちが初めて見た」という布施さんの考え。

話し合ったことをホワイトボードにまとめていき、発表の準備を進めました。そして、いよいよ第六時です。

■学習指導計画（全７時間）

第１時

▶学習目標の設定
何ができれば評論が読めたことになるかグループで話し合い，学習目標を設定。

▶教材文への導入
「最後の晩餐」の二つの画像を見て，どちらが修復後のものか話し合う。

第２時

▶「修復」について知る
絵画の修復について，教師の説明を聞く。

▶教材文を読む
全文通読をする。

第３時

▶筆者の「最後の晩餐」に対する評価を読み取る
・「最後の晩餐」とは，どのような絵なのか，絵に書き込みをしたり，裏切り者のユダは誰かについて話し合ったりする中で，絵の魅力を考える。
・筆者は「最後の晩餐」をどう評しているか考える。「ズバリ述べている表現」を抜き出し，グループで話し合う。

第４・５時

▶自分の考えをまとめる
三つの論点について，グループで話し合い，自分の考えをまとめる。

▶発表の準備をする
話し合った内容をグループごとにホワイトボードにまとめ，発表の準備をする。

第６時

▶発表会
グループごとに発表をする。筆者から直接話を聞き，筆者が評論文に込めた思いや考えを知る。

第７時

▶まとめ，学習の振り返り
自分の考えや，評論を読むこつをまとめる。


発表の準備をする生徒たち。

第１～５時の授業の模様は，小社ウェブサイトで詳しくご紹介しています。
「光村図書ウェブサイト＞みつむらweb magazine ＞授業リポート」からご覧ください。

特集

授業リポート（第六時）

筆者が登場！

「わっ、布施さんだ！」「教科書に載っている写真と髪型が違う（笑）」。筆者の布施英利さんが教室に入るやいなや、生徒たちがどよめきます。


生徒たちに挨拶をする布施さん。

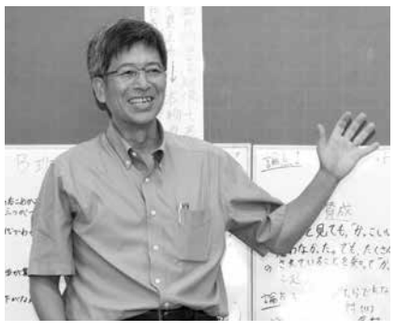
そして、宗我部先生があらためてご紹介。「布施英利さんは、美術に関する評論家として活躍されています。特に、解剖学の観点から美術作品を見ていくという分野では、日本で第一人者だそうですよ。今日は、絵の見方なども教えていただけたらいいですね」。

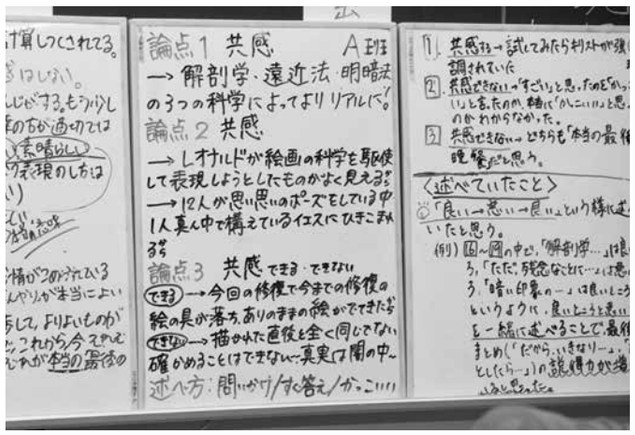
先生がそう言うと、布施さんが「よろしくお願いします」と一礼し、生徒たちも「よろしくお願いします！」と元気よく挨拶。布施さんは、黒板の前に用意された椅子に座り、教室全体を見渡しながら、授業を参観します。

さっそく先生は、今日の授業の目標を確認しました。「これまで、三つの論点について話し合ってきました。今日は、グループごとにまとめた意見を発表してもらいます。それによって、グループとグループの交流もできますし、今日はなんと筆者の方との交流ができます。そういう交流を通して、自分の考えを深めていけたらいいですね」。

黒板には、各グループが前時までに話し合った内容が、ホワイトボードにまとめられ、ずらっと並べられています。

「それでは、**論点❶**について発表したいと言っていたH班、口火を切ってください」。


「どんどん交流して，自分の考えを深めていきましょう」と宗我部先生。



グループごとに発表する内容をホワイトボードにまとめた。

論点❶ 「最後の晩餐」は「新しい絵」か？

H班は、「論点❶『最後の晩餐』は『絵画の科学が生み出した新しい絵』という布施さんの考え」について、グループで話し合ったことを、次のように発表しました。

＊　＊　＊

H班　布施さんは、解剖学・遠近法・明暗法などの絵画の科学を駆使しているから、それが今までなかった新しい絵だと言っています。私たちは「科学が駆使されている」という部分は納得できたんですけど、「新しい絵」なのかどうかはわからなくて。本当にそうなのかなって思います。

先生　なるほど。科学が駆使された絵だということには納得できたけど、「新しい絵」かどうかは、他を知らないからわからないということですね。他のグループ、論点❶についてどうでしょうか。先日の授業では、共感できるというグループが多かったけれど。共感できるという人、手を挙げてください。

生徒　（ほぼ全員が挙手）

先生　じゃあ、論点❶について、他のグループは納得しているということでいいのかな。では、H班が疑問に思った「新しい絵」ということについて、ちょっと布施さんにおききしてみましょうか。

布施　はい（椅子から立ち上がって）。レオナルド・ダ・ヴィンチは、ルネサンス時代の人です。ルネサンスという言葉には、「再生」や「新たに生まれる」という意味があるのですが、そのルネサンスを代表する画家がレオナルドなんですね。今、「新しい絵なのか疑問だ」という意見が出ましたけど、確かにそうですよね。レオナルドは、五百年前の画家ですから、今の皆さんから見たら、新しくはありません。

でも、時代を遡り、ルネサンス以前に描かれた絵画を見てみると、子どもが描いたような絵ばかりなんです。信仰心があって、そういう意味では心が打たれる絵ではあるのですが。


「『新しい絵』なのかどうかはわからない」と発表するH班。

それに対して、レオナルドは絵画の科学を駆使して「最後の晩餐」を描いた。それは、当時としては、そうとう新しかったと思います。

それと、僕はレオナルド・ダ・ヴィンチのファンなのであえて言いますけれど（笑）、この五百年前の絵は、今の私たちが見ても新しいと感じる部分があるんじゃないかなって思います。永遠に「新しい絵」なんじゃないかと。これは僕の主観です。

＊　＊　＊

布施さんの説明にじっと耳を傾ける生徒たち。「新しい絵なのかどうかわからない」と発表したH班の生徒たちも、深くうなずいていました。



「永遠に『新しい絵』なんじゃないかと，僕は思う」と布施さん。

論点❷ 「かっこいい」に共感できるか？

次に、「論点❷『かっこいい。』とは、どんな点がかっこいいのか。共感できるか」について発表していきます。前時で、この論点は「共感できる・できない」で、生徒たちの意見が大きく割れていました。さあ、どのような発言が飛び出すのでしょうか。

＊　＊　＊

B班　私たちは「かっこいい」に共感できるところもあるし、できないところもあって、すごく微妙です（笑）。科学的な技法がいっぱい使われていて、それは確かに「かっこいい」って思いました。でも、絵が完璧すぎて「かっこいい」というより、「怖い」って思いました。

先生　どうして「怖い」と思うんだろう。

B班　計算されつくしているところ。それから、キリストの足元の部分が不自然に塗りつぶされていて変な感じがしました。

先生　この部分だね（スクリーンに映し出された「最後の晩餐」の該当部分を指して）。では、他の班もひととおり発表していってもらいましょう。

E班　僕たちも、科学が駆使されているところは、確かに「かっこいい」と思います。でも、修復後は、色が淡くて「かっこいい」というより「きれい」だなと思います。

先生　「かっこいい」よりも、他に合う言葉があるんじゃないかという意見ね。G班はどう？

G班　「かっこいい」という言葉は、表面的で軽い感じがして、私たちはもっと、すごみのある言葉のほうが適切だと思います。

生徒　（一同笑い）

G班　例えば、「美しい」「すばらしい」「圧巻だ」「圧倒する」とか、そういう言葉のほうが、この絵には合うんじゃないかって。「かっこいい」という言葉は、わかりやすいけど、本当に言いたいことが伝わらないんじゃないかと思います。


E班は「『かっこいい』というより『きれい』だと思った」と発表。

先生　布施さんがちょっと苦笑いをされていますね（笑）。「かっこいい」ではなく、もっと重々しい言葉がいいんじゃないかという意見か。そういう感覚、とても大事だよ。他の班はどう？

F班　私たちは、「かっこいい」に共感できるという意見です。でも、布施さんみたいに絵をパッと見たときには思わなくて、布施さんの文章を読み、この絵がさまざまな工夫をされていることを知ってようやく「かっこいい」と思えました。

C班　うちの班は、ちょっと共感できないという意見です。私たちは全員、この絵を見たときに、「かっこいい」じゃなくて「すごい」って思いました。布施さんは「すごい」って思ったのを「かっこいい」という言葉で表したのか、それとも本当に「かっこいい」と思ったのか、そこがわからなくて。

先生　なるほど。それは、後で布施さんにおききしてみたいところだね。

＊　＊　＊

布施さんの「かっこいい」という表現について、「もっと適切な言葉があるんじゃないか」「本当に『かっこいい』と思ったのだろうか」と、生徒たちの議論がどんどん白熱していきます。そして、いよいよ論点❸に移ります。

論点❸ 本当の「最後の晩餐」とは？

最後に「**論点❸** 本当の『最後の晩餐』は、二十一世紀の私たちが初めて見た」という布施さんの考えについて、話し合っていきます。

＊　＊　＊

A班　うちの班では意見が割れました。布施さんの考えに賛成の人もいるけど、絵が描かれた当時のほうが、レオナルドが表現したかったものが見えるんじゃないかという意見もあって。

D班　私たちは、布施さんに共感できないという意見です。絵が描かれた当時は、色が濃くて、細かい描き込みも見ることができて、それが、レオナルドの表現したかったものだと思うからです。

C班　うちの班は、どちらとも言えないという意見です。レオナルドは「芸術に完成はない」って言っていますよね（※2）。だから、描かれた当時の絵も完成したものではなかったのかもしれない。修復後の「最後の晩餐」も完成したものではないから、どちらが本当の「最後の晩餐」なのかは、わからないと思いました。

先生　本当の「最後の晩餐」って、いったい何なんだろう。

G班　前の時間に、修復前と修復後の「最後の晩餐」を見比べたけど、それぞれによいところがありました。だから、どちらも本当の「最後の晩餐」だと言えるんじゃないかと思います。それから、今後も修復が行われてよりよい絵になるかもしれないし、本当の「最後の晩餐」はこれだ、って言い切れるものではないのかもしれないとも思います。

先生　なるほど。修復作業の意味も含んでいるような意見だね。本当の「最後の晩餐」って、何だろう。もう一度、グループで話し合ってみましょうか。

＊　＊　＊

生徒たちは、これまでに出た意見を受けて、さらに議論を深めていきます。

そして、「『最後の晩餐』は、どんなに手が加えられても一つしかない」、「どの時代の絵も、本当の『最後の晩餐』だと思う。布施さんの言う『芸術は永遠なのだ』は、きっとそういう意味なんだと思う」、「修復によって、その時代その時代の人の思いが乗せられて、『最後の晩餐』は完成に近づいていくのかもしれない」……などの意見が次々と出されていきました。

先生は、「本当の『最後の晩餐』とは何なのか、布施さんのお考えをお聞きしてみたいですね。そして、そろそろ時間なので、授業の講評をいただきましょう」と告げました。



「本当の『最後の晩餐』って，いったい何だろう」と，生徒たちに問いかける。



他のグループの意見を聞く生徒たち。

※2　これまでの授業で，レオナルド・ダ・ヴィンチが言ったとされる「芸術に決して完成ということはない。途中で見切りをつけたものがあるだけだ」という言葉を調べてきた生徒がおり，その言葉を指している。

布施さんから

布施さんは、これまでの発表を受けて、生徒たちに向かって次のように話しました。

＊　＊　＊

布施　皆さんの意見が、心にグサグサきました（笑）。まず「かっこいい」について話しますね。

僕が、実際にミラノへ行って「最後の晩餐」の前に立ったとき、自然と「かっこいい」という言葉が自分の中から出てきました。それが、まず事実としてあります。でも、大事なのは、僕が本当に「かっこいい」と思ったかどうかではなく、その言葉を文章にするときに使うかどうかなんです。普通は、レオナルド・ダ・ヴィンチの絵に対して「かっこいい」なんて、失礼だし使いません。でも、僕はあえて使いました。それは、なぜかというと、問題提起なんです。実際に今日、皆さんがさまざまに議論をしてくれました。うまいことといったなと思っています（笑）。

トルストイという小説家がこんなことを言っています。「優れた文学は、答えを与えてくれるのではない。問いかけを与えてくれるのだ」と。評論も同じで、答えを押し付けるものではないと思います。僕は「かっこいい」という言葉を使って、問いかけをしたんです。そこに答えはありません。答えは、皆さんが考えてください。

そして二つ目。これまで授業の中で「最後の晩餐」を何度も見てきたと思いますが、本当に「よく見て」いるでしょうか。ちょっとクイズをしたいと思います（笑）。

生徒　（一同どよめく）

布施　「最後の晩餐」の絵を見ないで答えてください。キリストは何色の服を着ていたでしょうか。服は二色で、下に着ている服と上に布をかぶせていたと思いますが、下に着ている服の色を答えてください。

（布施さんが、「赤色・青色……」と言い、生徒は自分が答えだと思う色で挙手）

僕は「かっこいい」という言葉を使って、問いかけをしたんです。

布施



特集
評論を読み，
自分の考えをもつ

布施　答えは赤色です。赤色以外に手を挙げていた人もいますね。何度も絵を見てきたはずですが、はたしてどれだけ見ることができていたのでしょうか。自分の目で「よく見る」こと。実はこれが、美術について評論するときに、いちばん大事なことです。

　そういえば、さっき、キリストの足元が不自然に塗りつぶされている、って言った人がいましたね。誰でしたっけ？

生徒　はい、私です。なんか変だなあと。

布施　それは、たいへん鋭い視点です。というのは、この部分はレオナルドが描いていないんですね。レオナルドの絵が尊重されていない時代に、ここに穴を開けて、扉をつくったんです（下写真参照）。その後、また穴を埋めて色を塗った。それで、こうなっているんです。だから、「なんか変だな」と思ったのは、鋭いですよ。

　美術の評論に大事なことは、「よく見る」ことと、そうやって「どうしてそうなっているんだろう」と考えることです。

　そして三つ目。僕は、細部が剥げ落ちた修復後の絵こそが、本当の「最後の晩餐」であると書きました。それはなぜかという と、レオナルドの絵について、細部の描き込みがすごいということは、すでによく言われていることなんです。だから、それに対して違うことを言いたかった。「細部でなく、全体の構成がすごいのだ」と。

　人と違うことを言われると、読者は気になって引っかかりますよね。そういう、いい意味で「脳に傷をつける」みたいなことが、文学や芸術の役割だと思うので、僕はあえて、読者が引っかかりを感じるように書いたんです。

＊　＊　＊

　生徒たちは、布施さんの言葉を聞き漏らすまいと、真剣な表情で鉛筆を走らせ、ノートに書き留めていきます。

「布施さんのお話、そして自分が気づいたことを、忘れないようノートにまとめておきましょう。まだまだお話をお聞きしたいけど、時間がきてしまいましたので、これで終わりにします。布施さん、今日は本当にありがとうございました」と宗我部先生が言い、大きな拍手で授業は締めくくられました。



不自然に塗りつぶされている部分を指し，
「ここに扉があったんです」と説明する布施さん。

大事なのは、自分の目で「よく見る」こと。

布施

生徒たちより

この単元を学習する前，「最後の晩餐」について，特に何かを感じたことはなかったけれど，今はこの絵を「かっこいい」と感じます。違う絵を見ているような気持ちです。絵に対する気持ちが，どんどん変化していきました。

布施さんの言った「優れた文学は，答えを与えるのでなく，問いかけを与えるのだ」という言葉が心に残りました。これから，自分が文章を書くときに思い出したいです。



私は「かっこいい」より，もっと重い言葉のほうがいいと思っていた。でも，布施さんが「『かっこいい』を使って問いかけをした」とおっしゃっていて，私たちは，布施さんのねらい通り，話し合いをしていたんだなと思いました（笑）。

　これまで，評論は「自分の意見を述べるもの」と思っていましたが，今回の授業を受けて，「自分の意見を読者が理解できるように伝え，自分の考えをもってもらうための文章」なのではないかと考えるようになりました。

初め，筆者がいらっしゃるので「答えを知りたい」と思っていました。でも，布施さんから「答えは自分自身で考えてください」と言われ，答えは自分で考えるもので，答えを「これだ」と限定して考えるのはよくないのだと思いました。



最初，描かれた当時の絵が，本当の「最後の晩餐」だと思っていたけれど，布施さんのお話を聞いたり，話し合いをしたりする中で，どの時代の「最後の晩餐」も，本当の「最後の晩餐」であると思えました。

話し合いの中で，「『かっこいい』という言葉でないほうがいい」という意見が出て，私も確かにそうだと思いました。でも，布施さんが，あえて「かっこいい」という言葉を使ったということを知り，そういう布施さんが「かっこいい」と思いました。

■ 図書館には特設コーナー

　宗我部先生が司書の先生にお願いして，図書館に「君は『最後の晩餐』を知っているか」の特設コーナーを作ってもらいました。置かれていた書籍は次のとおりです。

- 『レオナルド・ダ・ヴィンチ 復活「最後の晩餐」』（小学館）
- 『よみがえる最後の晩餐』（ＮＨＫ出版）
- 『最後の晩餐の真実』（太田出版）
- 『キリスト教名画の楽しみ方 最後の晩餐』（日本基督教団出版局）
- 『ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」はなぜ傑作か？―聖書の物語と美術』（小学館）
- 『図説 レオナルド・ダ・ヴィンチ 万能の天才を尋ねて』（河出書房新社）
- 『レオナルド・ダ・ヴィンチ 時代を超えた天才』（ＢＬ出版）
- 『国際関係がよくわかる宗教の本①ヨーロッパとキリスト教』（岩崎書店）
- 『世界名画の謎 作家編』（ゆまに書房）
- 『君はレオナルド・ダ・ヴィンチを知っているか』（筑摩書房）



授業を終えて

宗我部義則

「評論を読む」学習というと、「筆者の考えを読み取り理解すること」が目標になることが少なくないように思います。けれど、評論というのは「筆者は対象についてどんなことを言っているか」という内容だけでなく、どんな言葉で、どんな表現方法をもってその「こと」を伝えようとしているのか、筆者のレトリックに触れて、ある対象について「そう考える」筆者と、その対象について新たな知見・認識を得つつ、私は「こう考える」という読者とが対話するようなものではないかと思います。だとすると、何が言いたいのだろう、本当はこう言いたいのではないか、私はこう思うのになぜ筆者はこう考えたのだろう……そんなふうに問いを発しながら評論の文章に向かい合えたとき、私たちは評論を読んでいる（読めている）と言えるのではないかと思うのです。

今回はそんな考えのもとに、細部を精読して筆者の考えを確かめながら読むのではなく、文章と絵に触れて生徒たちが感じた共感や違和感をベースに、まるで読書会のように仲間と話し合いながら、筆者が言いたいのはこうではないか、この絵のこういうところをこんな言い方で表しているのではないか……と読む授業をやってみようと考えたのでした。そこへ筆者の布施さんが来てくださるという知らせ。筆者との対話が読者の自己内対話から、現実の書き手との対話になるという経験はそうできるものではありません。布施さんに率直に自分たちの考えを伝え、布施さんのお話に楽しげに、また深くうなずきながら耳を傾ける生徒たちの様子を見て、とてもうれしく感じました。

布施さんが、「あえて人が言わない言葉で表して、読者に問いを投げかけたのだ」と評論の書き手の意図をかい間見せてくださったことは、生徒たちにとって、とても大きな学びになったのではないかと思います。世に行われている文章、交わされる言葉には、表面上の意味だけでなく、「あえて」そう表す意図がある。評論の「書き手を読む」という読み方についても学び、考えるきっかけになったように思うからです。



そがべ・よしのり

1962年埼玉県生まれ。お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学非常勤講師。国立教育政策研究所「教育課程実施状況調査問題（中学校国語）」作成および分析委員。平成20年告示中学校学習指導要領解説国語編作成協力者。光村図書中学校『国語』教科書編集委員を務める。

授業を参観して

布施英利

評論でもエッセイでも、詩でも小説でも、文章を書くというのはたった一人の作業だ。同じく、文章を読むというのもたった一人の行為である。一人が一人に話しかける、それが文章というメディアだ。たとえ本が一万部売れて、読者が一万人いても（十万人でも千人でもいいが）、それは一対一万ではなく、一対一が一万ある。ずっと、そう思って、三十年近く文章を書く仕事をしてきた。

このたび自分の書いた文章を国語の教科書に載せていただいて、それを教材にした授業の現場を見る、という機会を得た。新鮮な体験だったのは「複数の生徒」が自分の文章を素材にしてディスカッションしている光景を目撃したことだった。一対一の世界とはちがう、集団（や社会）というものの中にも文章は在る、という発見だった。ずっと、一人でパソコンに向かい（昔は原稿用紙に向かい）、文章を書いてきたが、国語の授業、という現場を拝見して、そのことを教えられた。自分は、授業参観をしたのではなく、国語の授業を受けた、そんな教えられることも多い体験であった。国語の授業は、深い。

しかし最後に、やはりこうも書きたい。教室で生徒たちにも話したことだが、よい文章というのは、なにか答えを押し付けるのではなくて、「よい問いかけ」をするものだ。文章の手法として、主観を押し付けているような書き方をしてあっても、あくまでそれは「問い」にすぎない。異論、反論の呼び水となる、それも織り込んで書くのが評論だ。そこで、友だちと議論することはもちろんだが、その文章をきっかけにして、自分自身と議論する、自問自答する。それが文章を読む、ということの始まりでありゴールだ。

自分の考えをもつ。評論を読むということはそういうことであり、評論を書くというのも、そういうことである。たとえ声を合わせて文章を音読しても、それを声にして、耳にするのは、自分という一人の人間である。磨くのは、自分自身だ。授業も、そのためにある。授業を受けている生徒の、一人一人の目を見ながら、そう思った。

やはり最後は自分、文章は一対一が基本なのである。



ふせ・ひでと

1960年群馬県生まれ。芸術学者・批評家。東京藝術大学大学院修了後、東京大学医学部助手などを経て、現在に至る。著書に『君はレオナルド・ダ・ヴィンチを知っているか』、『「モナリザ」の微笑み』、『子どもに伝える美術解剖学：目と脳をみがく絵画教室』など多数。

アクティブ・ラーニング Q&A 第一回

今号より、新連載「アクティブ・ラーニングQ&A」がスタートします。学習指導要領改訂に向けて関心が高まるアクティブ・ラーニング。現場の先生方から寄せられるさまざまな疑問や悩みに、冨山哲也先生がご回答くださいます。

Q アクティブ・ラーニングとはどういう学習を指すのでしょうか。

A 課題の発見・解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習のことです。

平成二十六年十一月に、文部科学大臣から中央教育審議会に対して、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」という諮問（しもん）がされました。これは、次の学習指導要領の在り方についての検討を求めたものです。この諮問文の中で、「アクティブ・ラーニング」という言葉が使われて、注目されるようになりました。諮問文の中では、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）」という言い方がされています。

アクティブ・ラーニングについては、現在、中央教育審議会で議論されている最中であり、学習指導要領上の位置付けや定義などはまだ明らかになっていません。参考になるものとして、大学教育に関する文書の中で、次のように説明した例があります。

> （アクティブ・ラーニングとは、）教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である（※1）

ここからわかるように、もともと、教師の一方的な講義に偏りがちな大学の授業について反省し、学生がもっと能動的に学ぶような形態に改めていこうとする考え方だということがわかります。

また、本年度から、国が実施する「全国学力・学習状況調査」の生徒質問紙調査に、次のような項目が加わりました（傍線は冨山）。

> 授業では、学級やグループの中で自分たちで課題を立てて、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの学習活動に取り組んでいたと思う（※2）

この傍線部のような学習活動が、アクティブ・ラーニングの姿であるということもできるでしょう。



イラスト：田上千晶

Q 中学校の国語科の授業での、アクティブ・ラーニングの現状はどうなっているのでしょうか。

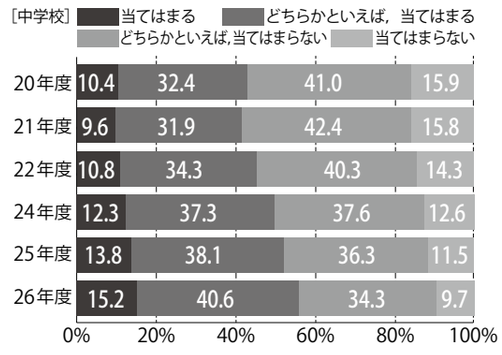
A 生徒が主体的に学習する授業が増えています。

前述したように、アクティブ・ラーニングについての定義がまだ明らかになっていませんので、ここでは、生徒の主体的な学習活動の状況ということで捉えてみます。

「全国学力・学習状況調査」の生徒質問紙調査では、次のような項目を毎年設定しています。

> 国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしていますか。

■「国語の授業で目的に応じて資料を読み，自分の考えを話したり，書いたりしていますか」という質問に対しての回答（※3）



この質問は、自ら目的をもった主体的な読みや表現活動が行われているかどうかを尋ねたものと見ることができるでしょう。これに対する肯定的な回答（「当てはまる」または「どちらかといえば当てはまる」と回答したもの）の割合は、平成二十二年度以降毎年増えてきています（右のグラフ）。平成二十一年度には四一・五%だったものが、平成二十六年度には五五・八%になっています。これを見ると、中学校の国語科の授業が、教師主導の形だけでなく、生徒の主体的な学習を促すものに変わってきていることがわかります。

この背景としては、学習指導要領で、発表、案内、報告、編集、鑑賞、批評などの言語活動例が示され、具体的な活動を通して学習する形式が広がってきたことが挙げられるでしょう。また、「全国学力・学習状況調査」のB問題が、目的をもって読んだり表現したりすることの重要性を強調してきたことも影響していると思います。もちろん、教科書の魅力的な教材・題材や学習活動の提示が、国語科の学習のスタイルを変えることにつながっていると思います。

国語科における言語活動とアクティブ・ラーニングの関係については、また改めて述べます。



冨山哲也（とみやまてつや）

十文字学園女子大学人間生活学部児童教育学科教授。東京都公立中学校教員，あきる野市教育委員会，多摩教育事務所，東京都教育庁指導部指導主事を経て，平成16年10月から文部科学省教科調査官（国語），国立教育政策研究所教育課程調査官・学力調査官。平成20年版学習指導要領の作成，全国学力・学習状況調査の問題作成・分析等に携わる。平成27年4月から現職。第1期<絵本専門士>。

※1 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』（平成24年8月・中央教育審議会）の「用語集」より。
※2 教師質問紙の中にも、「授業において、（このような学習活動を）取り入れているか」を問う項目がある。
※3 「平成26年度版 全国学力・学習状況調査 報告書【質問紙調査】」（国立教育政策研究所）より。

教えて！硯（すずり）のこと

このコーナーでは、これまで筆・墨・紙とご紹介してきましたが、今号でいよいよ最終回。硯についてご紹介します。

硯の工房を持つ書道用具店・宝研堂（東京都台東区）へお邪魔し、四代目の青柳貴史（あおやぎたかし）さんにお話を伺いました。



イラスト：北村ケンジ

1 硯の種類

――学校で使っている硯は長方形のものですが、お店にはいろいろな形の硯がありますね。

硯の形を「硯式（けんしき）」というのですが、長方形のものを長方硯（ちょうほうけん）、自然の石の形を生かしたものを天然硯（てんねんけん）と呼びます。それ以外にもさまざまな硯式がありますが、書写の時間に使うような実用硯（鑑賞用ではなく実用的な硯）の硯式は、大体、長方形と天然硯だといってよいでしょう。

――硯に使われている石は、どこで採れるのでしょうか。

中国と日本です。中国の石で作られた硯を唐硯（とうけん）といい、日本の石で作られた硯を和硯（わけん）といいます。

唐硯については、すごく種類が多いんです。その中で、中国の二大名硯（めいけん）といわれるのが、端渓硯（たんけいけん）、歙州硯（きゅうじゅうけん）です。特に、広東省の斧柯山（ふかざん）一帯で採れる端渓石（たんけいせき）で作られる端渓硯は有名です。石質が緻密で、細かく墨がおりるんです。うちの店でも、端渓硯は多く取り扱っています。

――「墨がおりる」とは、どういうことですか。

墨が磨（す）れて墨液になることを「墨がおりる」といいます。墨がよい具合に磨れる硯を「墨おりのよい硯」といったりもするんですよ。

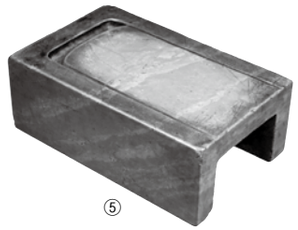
端渓硯、歙州硯は安いものでも数千円、高いものだと何十万円もします。ですから、中学生の皆さんには、安価な羅紋硯（らもんけん）をおすすめしています。千円ぐらいから購入することができますよ。安い硯でもきちんと手入れをすれば、墨はおりますので、最初は羅紋硯で十分だと思います。

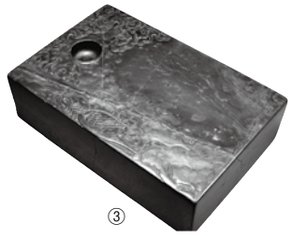
――和硯には、どのような種類があるのですか。

特に有名な産地は、宮城県の雄勝（おがつ）、山梨の雨畑（あまはた）、四国の土佐ですね。うちの店で扱っているのは、雄勝硯です。雄勝で採れる玄昌石（げんしょうせき）は、粘板岩で層になっていて石質が細かく、独特のよさがあります。

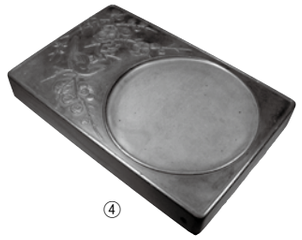


▲さまざまな種類の硯が並ぶ店内。


⑤


③


①


④


②

①羅紋硯　小・中学校で広く普及している硯。②端渓硯　石の自然の形を生かして作られた天然硯。③歙州硯　夜空に浮かぶ星のような金色の石紋が美しい鑑賞用の硯。④澄泥硯（ちょうでいけん）　梅の花と鳥の彫りが施された鑑賞用の硯。澄泥硯は端渓硯・歙州硯に次ぐ名硯。⑤洮河緑石硯（とうがりょくせきけん）　底がコの字型になった「太子硯」という硯式。産出量が少なく希少。

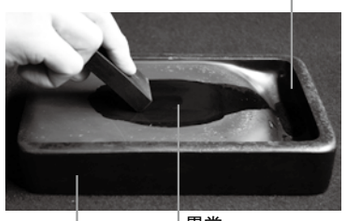

▲「硯を触ると，どんな石が使われているか大体わかります」と，青柳さん。

2 墨の磨り方

――お店に並ぶ硯を見てみると、墨液をためる部分が広いものと狭いものがありますね。

磨った墨をためる部分を、墨池（ぼくち）と呼びます。昔の中国の硯は、墨池が狭いものがほとんどです。当時は、墨を少し磨って手紙を書くことが多かったので、墨池が狭くてもよかったんです。今は、半紙に大きな文字を書くことが多いので、墨池が広いほうが好まれます。また、墨を磨る部分を、墨堂（ぼくどう）と呼びます。

墨を磨るときは、墨堂に少量の水を注ぎ、濃くなるまで磨り、墨池に落とします。それを繰り返していき、墨池にたまっ



た墨を、適度な濃度に薄めて使用します。
　墨の持ち方は、垂直に磨る方法と、斜めに当て、適当なところで裏返して磨る方法とがありますが、垂直に磨る場合は墨をそのまま墨堂の上に放置しないようにしましょう。わずかな時間でも墨が硯にくっついてしまいますので。

3 硯の手入れ

――硯の手入れのしかたを教えてください。

　使い終わった硯は、毎回きれいに水洗いし、水気を拭き取って乾かすのが理想です。墨堂、墨池の隅の部分には、墨が残ってこびりつきやすいので、つまようじなどを使って、丁寧に墨を取り除くとよいですね。
　また、どんなによい硯でも、長い間使っていると、墨がおりにくくなります。硯には「鋒鋩（ほうぼう）」という細かい突起があり、これによって墨を磨ることができるのですが、長く使っていると、この鋒鋩が磨滅してしまうんです。鋒鋩をよみがえらせるためには、目立砥石（めたてどいし）と呼ばれる柔らかい砥石をかけるのがいちばんです。目立砥石は、書道用具店で売っていますので、墨を磨る要領で砥いでみてください。

――お店でも、硯の修理をしてくれるそうですね。

　はい。硯の研磨、目立てはもちろん、割れたり欠けてしまったりした硯でも、再び使えるように修理することができますよ。
　また、うちの店では、修理だけでなく硯の製作も行っています。私は十代の頃から、祖父や父から作硯（硯を作ること）を教わってきましたが、硯の世界は奥が深く、とてもやりがいがあります。
　思い返せば、子どもの頃から、硯が身近にあったので、よく墨を磨って字を書いていました。墨は磨り方によって濃度が変わり、それによって書く文字の印象も変わるので、それがおもしろくてしかたなかったんです。
　今、自分で作った硯をお客様にお送りするとき、必ずお手紙を添えるのですが、いつも墨を磨りながら「どのようなことを書こうか」と思いを巡らせます。そういう、墨を磨りながら考える時間が、私にとっては大事ですね。
　書写の時間では、墨液を使うことが多いようですが、墨は、磨り方によって書いた文字の表情が変わるというおもしろさがありますし、墨を磨る時間というのは、なかなかよいものです。
　ぜひ、硯を使って墨を磨る機会を増やしていただきたいなと思います。


▲硯は，手だけで彫らず，肩を支点にして体全体の力をかけて彫っていく。



株式会社 宝研堂
東京都台東区寿4-1-11
ＴＥＬ：03-3844-2976
営業時間：月曜～土曜　9:00～18:00
　　第1・3日曜 10:00～17:00
定 休 日：第2・4・5日曜，祝日

硯ができるまで

　昭和十三年の創業以来、宝研堂の硯は、書家の先生など多くの人々に愛されています。二階にある工房では、硯の製作も行っています。その主な工程をご紹介します。





1 石の形を整える

採石された硯材を，丸鋸（まるのこ）を使って使用するサイズに切り分ける。次に円盤という，大きな円型の機械を使い，大まかな形に整える。



2 機械彫り

昔はすべて手彫りだったが，近年は墨堂の部分，墨池のいちばん深い部分などは機械を使って彫る。仕上げ彫りのときに時間がかからないよう，丁寧に彫る。



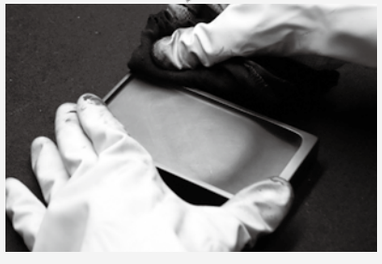
3 仕上げ彫り

機械彫りした硯材を整えるようにして，手で彫っていく。長方硯の場合，硯の胸の部分が左右対称に彫れているかなど，細心の注意を払う。



4 磨き

砥石や耐水ペーパーを使って，なめらかに研磨する。長方硯の場合，この磨きの工程がいちばん時間がかかり，また硯の出来を左右する。そして最後に泥砥石（どろといし）で目立てをする。



5 仕上げ

磨き上がった硯をよく乾かし，全体に薄墨を塗る。墨が完全に乾いたところで漆（うるし）を塗り，いったん乾燥させる。その後，墨堂の部分の漆を磨いて完成。

光村図書ウェブサイトのご案内

今年３月に全面リニューアルした光村図書ウェブサイト。
デザインを一新し，お探しの資料にアクセスしやすくなりました。
また，新コンテンツとして，さまざまな読み物を集めた
「みつむら web magazine」を設けました。
授業のヒントや楽しい読み物など，日々更新をしています。
ぜひご覧ください。

中学校 国語

http://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/c_kokugo/index.html



「中学校 国語」のページには，上記以外にも，「作者・筆者インタビュー」，「中学校国語教育相談室　最新号」など，さまざまなコンテンツを掲載しています。

■平成28年度版
中学校教科書のご案内

平成28年度版の内容をご紹介しています。教科書の魅力をコンパクトにまとめた動画などをご用意し，短い時間で内容がご理解いただけるよう工夫しました。また，平成28年度版の年間指導計画資料，紹介図書一覧などの資料もこちらからご覧いただくことができます。

■教材別資料一覧

表紙をクリックすると，教材別資料一覧がご覧いただけます。「中学校国語教育相談室」のバックナンバーや，リンク集，「わたしの授業」（指導案）へのリンクが貼られています。ぜひ毎日の授業にご活用ください。

■教科書について　よくあるご質問

現場の先生方から編集部に寄せられたご質問のうち，特に多くお問い合わせいただいた内容についてご紹介しています。

全国研究会情報

http://www.mitsumura-tosho.co.jp/kenkyu/index.html



■全国の研究会情報を検索できるページです。キーワードで簡単に検索して，お探しの研究会の情報を見つけることができます。
開催日，開催地，教科など，条件を細かく設定して検索することもできますので，ぜひご活用ください。

■研究会をご登録いただくこともできます。「掲載依頼はこちらから」ボタンを押して，データをご入力ください。

みつむら web magazine

http://www.mitsumura-tosho.co.jp/webmaga/index.html



・上記以外にも，美術や英語に関連したコラムなど，楽しい読み物を多数掲載しています。
・コンテンツの掲載の順番や内容は，時期によって異なります。あらかじめご了承ください。

各コンテンツの内容

■授業リポート

今号の特集でご紹介した評論の授業を，ウェブでも配信しています。紙面に掲載できなかった第１～５時の様子を中心に紹介しています。

■教科書の言葉Q＆A

言葉の表記，使われている書体など，教科書に関するさまざまな疑問について，教科書編集部がお答えしています。

■そがべ先生の国語教室

宗我部義則先生の授業のアイデア集。授業開き，ノート指導，話し合い指導など，明日の授業に役立つコラムです。

■デジタル教科書がひらく学び

デジタル教科書のあり方や，デジタル教科書を使ってどのような授業が考えられるか，中川一史先生にインタビューしました。

■本を読んで，考える練習をしよう

本のスペシャリスト・堀部篤史さんが，毎月，小・中学生におすすめの３冊を紹介しています。

■子どもの頃に出来なかったこと

『カラフル』『DIVE!!』『クラスメイツ』など，中学生に人気の作品を手がける，作家・森絵都さんのエッセイです。

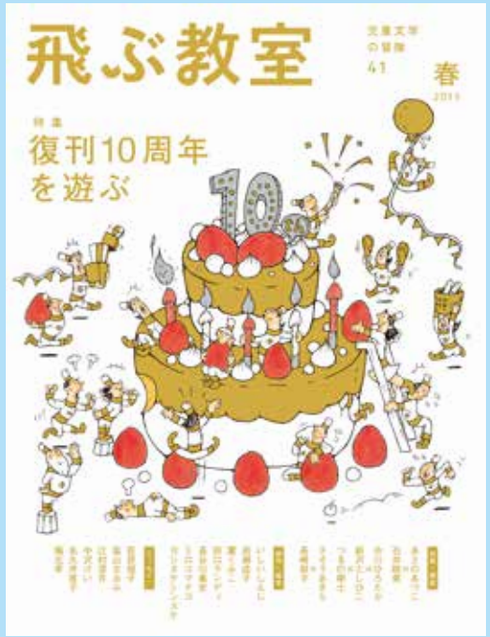
2015年度は，
復刊10周年
year!

児童文学の冒険

飛ぶ教室

年４回（1・4・7・10月25日）発行

「飛ぶ教室」は，石森延男，今江祥智，尾崎秀樹，河合隼雄，栗原一登，阪田寛夫各氏が編集委員となり，子どもの本と子どもの文化を掘り下げる総合誌をめざして，1981年に発刊した児童文学雑誌です。
作家の個性があふれる童話や短編，絵本の書きおろし作品のほか，作家や作品の魅力に迫るインタビューや座談会など，読みごたえある企画満載です。



2015年の春，「飛ぶ教室」復刊10周年を迎えました。41号は，作家・著名人70名が集う“復刊10周年記念号”です。「さんぱつやきょうこさん」ポストカード付き！

■第41号（2015春）
特集「復刊10周年を遊ぶ」
定価：本体1,000円＋税
ISBN978-4-89528-896-5

■第42号（2015夏）
特集「五味太郎編集号」
定価：本体1,000円＋税
ISBN978-4-89528-897-2



常に魅力的な絵本を世に出し続ける絵本作家・五味太郎。そんな五味さんが，「飛ぶ教室」の編集長になりました。五味編集長による極上の“遊び”の42号です。

●バックナンバーの詳しい内容は，光村図書ウェブサイトをご覧ください。http://www.mitsumura-tosho.co.jp
●ご注文は，お近くの書店，またはオンライン書店でどうぞ。

広報部便り

特集「評論を読み，自分の考えをもつ」はいかがでしたか。今回，宗我部先生の授業を取材させていただきましたが，時折，美術の先生が授業を見に来て，話し合いの場面で机間指導をされていたのが印象的でした。生徒たちが「最後の晩餐」の魅力について話し合っているときに助言をしたり，生徒からの絵に対しての質問に答えたり。生徒たちは，美術の先生とのやり取りからも，絵の見方を深め，自分の考えをまとめていったようです。教科の枠を超え，先生方が自然に協力し合っている姿が心に残りました。
次号は2016年１月中旬発行予定です。どうぞお楽しみに。

平成28年度「言語教育振興財団」研究助成金一般公募のお知らせ

一般財団法人「言語教育振興財団」では，小・中・高等学校，大学，教育研究団体等を対象とし，今後の情報化・国際化の進展を踏まえ，言語教育（国語教育・外国語教育等）の充実・発展を図るために，理論と実践の分野について優れた研究開発を行う団体または個人に対して助成します。

助成内容	①言語教育の内容・方法に関するもの（教育内容・方法部門） ②言語教育教材の質的向上に関するもの（教材部門） ③教育機器を利用した言語教育の在り方に関するもの（教育機器部門）
研究期間	平成28年４月～29年３月（原則１年間）
応募資格	言語教育（国語，英語，日本語等）に関して研究開発を行う教員及び教育開発を行う小・中・高等学校・大学・教育研究団体（学校の学年・教科単位を含む）
助成件数及び金額	助成件数は50件まで。 助成金額は１件につき20万～40万円 （団体の場合は40万円まで，個人の場合は30万円まで）
応募方法・締め切り	・研究開発活動についての企画書または実施した実践報告書等の参考書類を添えて，別に定める「助成金交付申請書」を，平成27年12月22日（火）必着で，当財団事務局に郵送。 ・「助成金交付申請書」を希望される方は，返信用封筒（82円切手添付）を同封の上，当財団事務局までお申し込みください。 ・この応募要項については，都道府県教育委員会等の推薦の場合も同様に扱います。
決定・発表	当財団「選考委員会」にて選考を行い，選考結果は平成28年２月末までに文書にて通知します。平成28年３月末に銀行振り込みで交付します。
問い合わせ先	一般財団法人言語教育振興財団　事務局 〒141-0021　東京都品川区上大崎2-19-9 TEL 03-3493-7340　FAX 03-3493-2174 E-mail:gengo-k@star.ocn.ne.jp